

## 「主イエスは抱きしめてくださる」

マタイによる福音書 19章 13節～15節

説 教 軽 込 昇 牧 師

ガリラヤの町を主イエスはめぐっておられます。主イエスが来られると聞いて、人々は子どもたちを連れてイエス様の祝福を求めてきました。18世紀の画家F.V.ウーデにドイツの教会に場面を移して描いた「その子らを我に来させよ」という有名な絵があります。弟子たちは子どもたちを押しとどめましたが、主イエスは一人ひとりの子どもの頭や肩に手を、両手を置いて抱きかかえるように祈られました。主イエスおひとり裸足です。主イエスの行かれるどこでも見られた心温まる光景でした。

主イエスはこの子どもたちがこれからどんな苦しい人生をたどっていくかをよくご存じです。主イエスは、優しい方だったから子どもたちを祝福されたわけではありません。十字架に進み行かれるイエスであればこそ与えられる祝福です。子どもたちの罪をも背負って十字架にかかられる主イエスが、子どもたちを抱きしめ祝福されるのです。私たちもまた、主イエスに抱きしめられ祝福されています。このことを伝えるために今、私はここに遣わされているのです。

旧約聖書で、神は天地創造の時、ご自分がお造りになったものを見て「良し」とし、被造物を祝福されました。創世記12章には、神の祝福を受けたアブラハムが、祝福を取り次ぐ役目を与えられるという約束があります。私たちも、ただ祝福されるだけでなく誰かに伝えるために、祝福を受けるのです。

新約聖書では、祝福は主イエスによる救いであり罪の赦し、福音そのものです。主イエスの宣教は、神が私たちを創造された時の祝福をもう一度、主の十字架と復活によって回復されることです。神の祝福の中に生きること、それが罪の赦し、救いに他ならず、伝道とは、その神の祝福を伝えるものにされることです。「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。」(ローマ人への手紙12章14節)「…あなたがたが召されたのは、祝福を受け継ぐためなのです。」(ペテロの第一の手紙3章9節)

これは私自身の経験です。頸椎カリエスという病気で幼少年期の10年間寝たきりの生活でいつ治るかわからない、苦しみを誰にぶついたらよいかもわからない索漠たる世界、時でした。幸いに17歳で病気が治り、3年遅れで中学3年生になり、高校にも進学しました。それまでは

すべて、病気のせいでうまくいかない、病気さえ治ればという思いでしたが、いざ、学校に行けたとなると今度は何かぼっかりと穴が空いたようでした。

教会に行ったのは高校1年の秋でした。遍歴は終わりました。私をお前と呼びかけ、真直ぐ私に向かってくくださるイエス・キリストの父なる神様を見出した、いや見つけていただいたのです。それまでの神のいない戦いが終わって、神に、何故ですかとむしゃぶりつきぶつかっていけるのです。神の胸倉をつかんで何故ですかとわめくことができる、それが祝福です。もう一度神のいない世界に戻りたいと思ったことは、一度もありません。

主イエス・キリストが抱きしめてくださる、それは主イエスがただ優しい方だからではありません。主イエスの祝福は罪の赦しです。礼拝において、私たちを造られた神が、主イエス・キリストとしてはっきりとご自身をあらわされ、わたしたちに対峙してくださっているのです。礼拝する時、主イエスの祝福、私たちを抱きしめ罪を赦してくくださる主イエスそのものを体にするのです。

あまりに大きな苦しみ、痛手を受けると立ち直るのに時間がかかります。心の傷など癒してほしくない、慰められたくないという方もおられるでしょう。礼拝を守ることもできない方もおられます。だからこそ、私たちはここで真剣に祈り、今ここで神に礼拝をささげるのです。主イエスが子どもを抱き上げ、両手で抱きしめてくださったお姿が、私には思い浮かびます。主は今、苦しんでおられる方々のために祈っておられる、そのために十字架にかかられた。そう信じて、私たちも祈るのです。

主イエスはあなたの頭に肩に両手を置いて祈っていてくださる。主イエスが苦しみ、復活されたことによって、あなたという存在の本当の重さと意味が輝くのだということ、しっかりと心に刻みつけていただきたいのです。主イエスがやさしいから愛してくくださるものではありません。主の愛の中には罪の赦しがあります。だからこそ、私たちは主イエスに抱きしめられ、本当に生きていけるのです。

(記 説教要約奉仕者)